とある科学の贋作投影

竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の贋作投影

【Ｎコード】
Ｎ９０３２Ｙ

【作者名】
竜胆

【あらすじ】
武器投影から贋作投影に変更しました！！

これは学園都市に住む姉弟の物語です…

稚拙な文で、独自解釈やオリキャラ等がでますが、楽しんでもらえると幸いです…。

第一話　日常（前編）

学園都市――

東京西部の未開拓地を一気に切り開いてつくられた学生の街で、大小様々な教育機関に研究施設、２３０万人もの住民をかかえるこの街では――

――「記憶術」や「暗記術」という名の能力開発が行われていた。

これは、そんな街に住むとある二人の姉弟の物語である。

「お腹空いた…」

７月２０日。
全国の学生にとって１ヶ月近く学校に行かなくていいという長期休暇の始まりの日。
多くの学生たちが夏休みだのプールだの騒いでいるなかで竜胆　錬はそう呟いていた。

「なんで夏休み初日から財布は冬を迎えてるのさ！！」

暑さのせいか、車の通りは多いが人通りは全くない。そんな路上で叫びをあげながら投影したバイク（無免許）で街中を疾走していた。

…

とりあえず財布が空では生きていけないということで、銀行に金を下ろしに行ったのだが…

「昼間っからシャッター降りてやがるじゃねーか。銀行強盗でもきてやがんのか？」

錬の見解は当たっていたらしく、中から”動くんじゃねぇ！！”等の声が聞こえてきた。

「マジできてんのかよ…風紀委員待つのめんどいし殴り込みますか。」

バイクのアクセルを踏み直し、銀行のシャッターへと突っ込む。そしてシャッターを突き破り、店内に突入すると予想通りに銀行強盗の真っ最中だった。

「すいまっせーん事故りました！！皆さん怪我はないですか？」意図的に突入したのだが、あえてふざける。

「な、なにやってんだテメェ！！」
強盗グループの一人が驚いたように声をあげた。ちなみに金髪、ハゲ、グラサンの3人組だった。

「それはこっちの台詞だ！！テメェらが馬鹿げたことやってやがるから金がおろせねぇだろうが！！」
正論は正論だが”今そういう空気じゃないよね！？”と、店員や客は内心そう思っていたが強盗犯を刺激しないため口には出さない。

「覚悟はできてんだろうなぁ！？」
そう啖呵をきって、
「投影―開始」（トレース―オン）
の掛け声と共に錬は右手に真紅の槍を投影した。
「お前それなんの能力だ！！」強盗グループのハゲの問いかけに、
「テメェらに教えるつもりはねぇ。（設定参照）」
槍を構えたところで、目の前のハゲがぶっ飛んだ。
「錬！やっぱりアンタだったのね！」
そう言って現れたのは姉の竜胆　寿々である。
「寿々姉、こいつらは俺の獲物だ。捕らないでもらおうか。」
錬が寿々にそういうと、今度は錬がぶっ飛んだ。
「アンタは風紀委員じゃないただの一般人でしょうが！！」
「その一般人を容赦なく殴る風紀委員がいてもいいもんかよ！！」

強盗を前にして姉弟喧嘩とは…

「「調子に乗ってんじゃねぇぞ！！」」
金髪とグラサンが痺れを切らして二人に突っ込んできたが、

「「邪魔すんじゃねぇ（ないわよ）！！」」

息ぴったりで錬は槍の柄でグラサンを、寿々は金髪をぶっ飛ばした。

重ねて言おう。
この物語は、とある姉弟が主役である。――

第一話　日常（前編）（後書き）

いかがだったでしょうか？

キャラ設定（前書き）

タイトル通りキャラクター設定です。

キャラ設定

オリキャラ設定

竜胆　錬（リンドウ　レン）
性別：男
所属：柵川中学一年
家族構成
父：
母：
姉：竜胆　寿々
能力名：贋作投影（グラデーション・エア）
Ｌｅｖｅｌ４、今ここに無い物体を一時的に存在させる能力。
戦闘センスは中々のもの。大抵の武術を使いこなせる（二流）
身長は約１６５ｃｍ
頭はそこそこいい
ルックスはそれなりにいい
くすんだ金色の短髪でよく高校生に見られることも
免許はないが、車両の運転が可能
左目は義眼

竜胆　寿々（リンドウ　スズ）

性別：女
所属：当麻と同じ高校、風紀委員第１５９支部

家族構成
父：
母：
弟：竜胆　錬
能力名　相対操作（ファンブルコントロール）
Ｌｅｖｅｌ５第三位、引力と斥力の操作が可能。引力の応用で小規模のブラックホールも作れる。

戦闘センスはかなり高い
全武術において一流の実力者
身長は約１６０ｃｍ
ものすごい馬鹿
吹寄に次ぐ”対カミジョー属性”の持ち主
ライトブラウンの長髪

共通設定
当麻と従兄弟、美琴と幼馴染み

キャラ設定（後書き）

主人公の能力は、まんまＦａｔｅのアーチャーさんです。（汗

主人公達の両親や第１５９支部の人たちはいずれ出す予定です。

第二話　日常（後編）（前書き）

それではどうぞ。

第二話　日常（後編）

7月21日

成績の悪い生徒には、当然補習授業が存在する。
それは学園都市も例外ではなく、夏休み前日に死刑宣告（補習対象者の呼び出し）を受けて寿々は補習を受けに登校していた。

「あー夏祭りで幼馴染みと再会とか家出少女がつごうよくいたりせえへんかな～」
「ラブコメしたいぜいラブコメしたいぜい。海にプールに水着に浴衣。イベントだらけのラブコメ夏休みでも到来しないかにゃー」
「お前らはどこまで馬鹿なんだよ。」

補習の真っ最中だというのに上条、土御門、青ピの三馬鹿トリオは相変わらず無意味な議論をしていた。
そこへ…

「上条ちゃーん？これ以上喋りやがったらコロンブスの卵ですよー？」

この学校の名物教師、月詠小萌が説教をかまし、”おーけーですか？”そう言って再び黒板に文字を綴っていく。

…

「ていうか、寿々はなんでＬｅｖｅｌ５なのに補習を受けてんだ？Ｌｅｖｅｌ５ってのは頭いいんじゃないのか？」
補習が終わって上条は寿々に問いかけたところ―

「うるさい馬上条当麻」
罵倒が帰ってきた。
「従兄弟にその言い様は無いんじゃないか？」
「アンタの従兄弟という事実が一生の恥よ」
「うう…上条さんは心が折れそうです…」
こんな感じの会話を聞いたクラスメイトたちは歓喜の表情で、
「さ、さすがは竜胆！吹寄に次ぐ対カミジョー属性完全無効化の女！」
「あそこまで完璧な罵倒は吹寄でも無理じゃないか？」
「我々人類の希望やね。竜胆寿々の罵倒スキルを研究すればカミやんを倒せるかもしれへん！！」

罵倒された上に倒されるのか！？――と、嘆く上条であった。

…

「なんで俺まで連れてくんだ！？あと引きずるのは止めてくれ！！」
錬は、昨日の件の後で、普段から槍とか持ち歩いているのかなど警備員に洗いざらい質問され、厄介な自分の能力の説明をしたり、始末書を書かされたりした。幸いバイクは消しておいたので罰則等はなかったが、帰宅するころには夕日が沈みかけており、急いで帰宅して眠りについた。しかし朝起きるなり御坂美琴から「セブンスミストに買い物行くから錬もついてきなさい」と言われ、無視して眠りについたら御坂美琴とクラスメイトの佐天涙子と初春飾利が突入してきて現在に至るというわけである。

錬の問いかけに対して御坂は、引きずるのをやめ、当たり前のように「荷物持ちに決まってるじゃない。」
と答え、”そんな理由で安眠妨害ですか。人の家に不法侵入ですか。”と、錬は心の中で呟いた。ちなみに寝巻きのジャージのままである。
「そう言えば錬の能力ってなんなの？」

そう問いかけてきたのは佐天だ。ぶっちゃけ今まで大した交流は無かったため、まともに話すのははじめてだったりする。
「わ、私も知りたいです！」
初春も聞いてきた。ぶっちゃけ――（以下略）
まあ聞かれたからには答えるしかないので、
「俺の能力は”贋作投影（グラデーション・エア）”今ここに無いものを一時的に存在させる能力だまあ見たことのあるものしか出来ないけどな。美琴姉のことだから台車とか用意させるつもりなんじゃないの？荷物持ちっていうぐらいだし。」
そう言って錬は「投影――開始」の掛け声と共に台車を投影した。
「さすがは錬ね。やっぱアンタの能力便利だわ。」
「だからって朝から呼び出すなよ…」

そんな会話をしていると初春が、
「二人は知り合いなんですか？」
と言う問いを投げかけてきた。
「まあ知り合いというか幼馴染みっていうやつね。」
「ただの腐れ縁。」
同時に答えたところで御坂は錬にビリビリを食らわせた。
「なんでビリビリするの！？事実いっただけじゃん！！全く寿々姉といい美琴姉といいなんですぐに実力行使なのさ！？」
悲痛なツッコミを入れつつボロボロの自分の服を見て絶句する。
「とりあえず服を変えなくちゃな…」

「「どうやって！？」」

初春と佐天が同時にツッコむ。それもそのはず、ここは道のど真ん中だし公衆の面前である。

「投影―開始」

その掛け声と共に錬のボロボロのジャージがTシャツとジャージに早変わり。超早着替え術である。

「ずるい！ずるいですよ錬さん！」

声をあらげた初春に錬は、

「いや、ずるいと言われても…」

と、返すことしかできなかった。

そんなこんなで談笑しながら街中を歩いていると数人の男子生徒が一人の男子生徒に絡んでいるのを見かけた。

「なにやってるんですか」

初春が静かに言った。

しかし男子生徒たちは初春の腕章を見るなり、

「風紀委員か、別に何でもねーよ。」

そう言って立ち去ろうとしたところで錬が

「何でもねぇこたぁねーよな？」

男子生徒のうちの一人の肩を掴み、そう言い放った。

「テメェ！なにしやが…」

言いかけたところで錬の右手に握られる槍を見て絶句した。

「こいつで突かれたくなきゃあさっさとそいつに謝るんだな。」

男子生徒たちは、しぶしぶ”すまなかった”と、謝ると去っていった。
「大丈夫ですか？」
後ろをみると、初春が絡まれていた男子生徒に声をかけていた。
「もっと早く来いよ…」
悪意に満ちた目でそう言って男子生徒は去っていった。
「助けられといてあの言い方はねぇよな…」
錬は走り去った男子生徒に一瞥すると、再び歩き進めた。

…

第二話　日常（後編）（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想ご指摘アドバイスお待ちしております。

第三話　虚空爆破（前書き）

更新は気分です。

第三話　虚空爆破

ここは風紀委員第１５９支部

「今日は非番じゃ無かったかしら？」
寿々は半分キレ気味で後輩の高橋菫を睨む。
「しょうがないじゃないですか。最近”連続虚空爆破事件”が頻発してるんですから。ていうか到着早々ぼやくなっつの！」
高橋が愚痴混じりにそういうと、
「先輩相手にその口の聞き方は何？」
と言いつつ寿々は高橋の首をホールドした。
「窒息する！ギブギブギブアップです先輩！！生意気言ってすいませんでした！！」
このまま絞め続けたら本当に窒息しそうなので寿々は放すことにした。
「で、呼び出した用件は何？」
非番なのに呼び出された訳を高橋に尋ねると、
「今までのの犯行パターンからして犯人の狙いは私たち風紀委員ということがわかったんです。」
こいつ一応働いてんだな。と関心しつつ続きを聞いていると、
「なので、人通りの多い所でおと―パトロールをお願いします。」
「アンタ今囮って言おうとしたわよね…まあいいわ、行ってきたげる。」
囮という言葉は聞き捨てならなかったが、こっそりサボってやろうという思惑を秘めて寿々は１５９支部を後にした。

…

――僕が…僕を救う
悪意に満ちた目で、少年は街を歩いていた。
僕を救えない風紀委員は――いらない――

…

ところ変わってセブンスミスト。
荷物持ちとして同行を余儀なくされた錬は女子三人の買い物に付き合わされていた。
「なあ…俺帰っていいか？」
「「「ダメ」」」
「なんでさ！！」

そんな会話を何度か繰り返したところで、
「あれ？錬じゃない。こんなとこで何やってんの？」
パトロールサボり中の寿々である。
「俺は美琴姉とクラスメイト二人に荷物持ちとして連行されて今に至るというわけだ。」
錬が自分の身の上を話すと寿々は、
「丁度いいわね…私の分も運んで貰うわ。」
「それはないよね？寿々姉まで俺をパシったりしないよね！？」
錬は必死に訴えるも”アンタは私の下僕”と　いう言葉に心をへし折られた。

…

そんなこんなで寿々も合流し、女子４人と心を折られた下僕１人で買い物を続けていると、
ＢｕＢｕＢｕＢｕＢｕＢｕ
と、寿々と初春の携帯が同時に鳴った。

「重力子の急激な加速が確認されたらしいわ。しかもここで。例の虚空爆破事件のターゲットにされたらしいわ。だから初春さんと美琴は避難誘導をしたら即避難。佐天さんと錬はさっさと避難しなさい。」
寿々が落ち着いて指示を出していく。
「「でもそれだと寿々さんが…」」
初春と佐天が寿々を心配するが、御坂と錬は…

「「大丈夫、一応Ｌｅｖｅｌ５だから。」」

声を揃えてそう言った。

…

「全員避難終わったのかしら…」
人１人いないセブンスミストを見渡して寿々は呟いた。しかし…

「お姉ちゃぁーん！！」

小さな女の子がぬいぐるみを抱えて走りよってきた。

「メガネをかけたお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡して、だって。」

そう言って少女はぬいぐるみを渡してきた。が、突然ぬいぐるみが歪み始めた。

だがあえて寿々はぬいぐるみを何事もないように受け取り、歪み続けるぬいぐるみの中心に引力を発生させて、ぬいぐるみそのものを消滅させた。

「怪我はない？」

うん！と、力強い少女の返事を聞いて、寿々は何事もなかったように少女と店を出た。

…

「おかしい、おかしいぞ…なんで爆発しないんだ？」

虚空爆破事件の犯人である介旅初矢は動揺を隠せないでいた。

「そこの兄ちゃん同行願えるかい？」

この状況で1人だけ反応のおかしい介旅を錬は見逃さなかった。
「ぼ、僕が何をしたというんだい？」
しらばっくれる介旅に、静かに、それでいて威圧を込めた声で、
「しらばっくれてんじゃねぇよ…爆弾魔。」
そう言って顔面を蹴り飛ばした。しかし介旅は、
「いつもこうだ…こうして力でねじ伏せられる…殺してやる…お前みたいなのが悪いんだよ！！さんざん上から人のこと見下しやがって…だから俺は幻想御手（レベルアッパー）で強くなった！！強くなって不良共も役立たずの風紀委員もみんな残らず殺してやるんだ！！」
そう言って介旅は鞄からスプーンを取り出したが、
「力言い訳にしてんじゃねぇぞクソ野郎が！！テメェの曲がった性根叩き直してやるから覚悟しやがれ！！」
スプーンを持った手を蹴り上げ、能力を発動し、
「投影―開始！！（トレース―オン）」
介旅の頭上に大量の刀剣が出現する。
「荒療治だ。”固定解除！！（フォールダウン）”」
介旅の頭上にあった無数の刀剣が落下した。

土煙が上がり、その晴れた先には無傷で泡を噴いて倒れた介旅と、
無数の刀剣がコンクリートに突き刺さっていた。

…

それから程無くして介旅は警備員に連行されていった。

第三話　虚空爆破（後書き）

とりあえず登場した新キャラの設定を、

高橋　菫（タカハシスミレ）
性別：女
中学二年生
風紀委員第１５９支部所属
能力名
情報転送（ダウンロード）
Ｌｅｖｅｌ２、自分の脳内にある情報を他者の脳に送信する能力。
送信できる距離はＬｅｖｅｌ２で半径５００ｍ。送信対象を増やすほど距離は縮む。

黒髪ショート、メガネ
１５９支部の情報整理担当

感想ご指摘アドバイスお待ちしております。

第四話　鍊の夏休み（前書き）

虚空爆破から飛んで、再び日常パートに逆戻り。

木山先生ファンの方、誠に申し訳ございません。

第四話　鍊の夏休み

幻想御手事件終結から数日後…

俺は第６学区のアミューズメントパークに向かっていた。
ちなみに幻想御手事件の方は寿々姉と美琴姉たちがいろいろと頑張ったらしい。

とりあえずこうなった経緯を話そうと思う。

…

確か昨日のことだった。

一日中寝ていた俺は、起きて着信履歴を見ると『御坂美琴』の四文字。

正直言って、嫌な予感しかしなかった。

寿々姉程ではないが、美琴姉も俺を下僕扱いしてくるからである。
しかし、かけ直さないと黒焦げにされそうなので仕方なくかけ直すことにした。
数回のコールの後、美琴姉が電話にでた。
『もしもし？』
「錬だけどなんの用？」
『明日、第６学区のアミューズメントパーク前に来なさい。来なかったらアンタを感電死させるわ』

予想外にして意味不明な脅迫だった。
感電死という恐ろしい単語より先にアミューズメントパークに呼び出される訳がわからなかった。
美琴姉に事情の説明を求めたが、既に電話は切れていて、”ツー、ツー、”という音だけが耳に残っていた…

…

で、今に至るのであった。

美琴姉の指定した集合に着くと、見知らぬ女子がいた。
制服は確かに常磐台の物だか、美琴姉ではないことは確かだ。だからきっと気のせいだろう。さっきからその女子に呼ばれているのも…

――アレ？

状況を掴めないでいると、美琴姉から電話がかかってきた。
「もしもし？」
『ああ錬？昨日いい忘れてたんだけど集合場所に着いたら藤枝って子がいると思うから能力の使い方を教えたげて。』

ツー、ツー

また勝手に切られたが、この際仕方ないとしよう。藤枝さんとやらを待たせるのも悪いし。

「えーっと、藤枝さんでいいのかな？」
「はい！今日は竜胆さんに能力の使い方についてのアドバイスをもらいに来ました！！」
どうやら藤枝さんはやる気らしい。
「じゃあここじゃ落ち着いて話しにくいし喫茶店にでも入ろっか。」
「はい！！」
藤枝さんの同意が得られたところで俺たちは近場の喫茶店へと向かった。

…

「とりあえず自己紹介でもしようか。俺は柵川中学一年、竜胆錬だ。」

「私は常磐台中学一年の藤枝渚です」

一年と言ったとき、とても驚いたような顔をしていたのはなんだったんだろうか。

「とりあえず竜胆さんの能力を見せてもらえませんか？」

「それはいいけど、同年代なんだし呼び捨てでもいいんじゃないのか？」

「男の人を呼び捨てにするのはちょっと抵抗があるので…錬くんって呼んじゃダメですか？」

そう言って小首をかしげるという強力コンボを叩き出した藤枝さんはなんというか…その…可愛かった。

「う、うん。それでいいよ。」

「話を本題に戻すけど、錬くんの能力を見せてくれない？」

「わかったよ。『投影―開始！！』」

そう言って俺はティーカップを作り出した。

「え、いきなりティーカップが出てきましたけど？」

藤枝さんは驚いたようだ。「これが俺の能力、”贋作投影”だ。今ここにない物体を一時的に投影する能力なんだ。普段は武器を作り出して攻撃するんだけどこんなところで武器なんか出したら警備員に通報がいっちまうからな。」

「便利ですね～」
「次は藤枝さんの能力を見せてもらえる？見ないとアドバイスできないし。」

（私は呼び捨てにしてるんだから渚って呼んでくれてもいいのに…）
「わかりました。
このティーカップ使ってもいいですか？」
「どうぞ。」
藤枝さんが能力を使うと、俺の投影したティーカップがつぶれてナイフになった。
「これが私の能力”圧縮変換”です。存在する物を圧縮してその形を変えることができるんです。」
「それで変化したのか。」

…

「で、互いの能力を説明したのはいいけどこれからどうするの？」
「どうしましょうね…」

「あのさ、藤枝さんさえよければの話だけど、これから第６学区のアミューズメントパークに行かない？」
「はっ、はい！！喜んで！！」
こうして俺たち二人は、アミューズメントパークへと向かった。

そこでの話はまた後日ということで…

第四話　錬の夏休み（後書き）

ラブコメ強めの今回は如何だったでしょうか？
とりあえず今回の新キャラの設定を、

藤枝　渚（フジエダナギサ）
（女）
常磐台中学一年
能力
圧縮変換（チェンジコンプレッション）
Ｌｅｖｅｌ３、現実にあるものを圧縮し、形を変える能力。
御坂の後輩。

とまあこんな感じですね。
現在主人公を誰落ちにしようか迷っとります。なのでアンケをとりたいと思います！！

1、初春

2、佐天

3、今回出した新キャラ

4、他の原作キャラ

締め切り予定は今のところありませんので。

感想ご指摘アドバイスお待ちしておりまーす！！

第五話　死の鉄槌を（前書き）

前回の続きです。

元ネタはわかるでしょうか？

第五話　死の鉄槌を

前回の続き。

アミューズメントパークの帰り道。
突然だが俺は謎の覆面集団に追われていた。

「何で追いかけてくるのさ！！てかお前らなんなんだよ！！」

「「「「「「「「「リア充には死の鉄槌を！！」」」」」」」」」」」

「ハモりすぎて怖ええ！！」

普段なら迎え撃てただろう。しかしこの覆面共は数が多く、鎌やら槍やらライフルやら…

とにかく警備員は何やってんだと言いたいぐらいに銃刀法違反のオンパレードだった。

恐らく、一瞬でもこの足を止めたら殺されるだろう。
当然演算などする余裕もない。

「確保ー！！！！」

「ぎぃやぁぁぁぁ！！」

…

しばらくして俺は、水をかけられて目を覚ました。

どうやら俺は捕まったらしい。

その証拠に手足を縛られ、暗い倉庫のような場所で、目の前にあの覆面集団がいた。

「異端者には」

「「「「「「「「死の鉄槌を！！」」」」」」」」」

「これより、異端者竜胆錬の裁判を開始する。」

どういう状況だこれは？

「異端者の罪状を読み上げろ、猪狩審問官」

猪狩ってうちのクラスにいなかったっけ？

「はい、川原裁判長。彼は喫茶店で常磐台の女子と会話していたのであります！！」

川原もうちのクラスにいたような…

「つまりわかりやすく言うと？」

「可愛い女子と喋っていたので羨ましいのであります！！」

やっぱうちのクラスメイトたちだよね！？

「結構だ。ここに異端者竜胆錬の刑罰を決定する！！審問官たちよ、札を挙げよ！！」

ここだけバラエティーっぽいなオイ

挙がった札は、

死刑×１０

「よって死刑！！」

「事情を説明しろォ！！」

いきなり殺されてたまるか！！

「どうした異端者竜胆錬。死刑の内容が気になるのか？」

「そもそも何故に死刑！？」

「「「「「「「「「常磐台の女子と喋っていたからだ。」」」」」」」」」

なんと理不尽な！！

「刑罰の内容は人間黒ひげ危機一髪だ。貴様の体にナイフを一本ずつ刺していき、首が飛ぶまで続けるものとする。」

「人間の首は飛ばないからね！？しかも確実に死ぬからね！？」

「「「「「「「「「だって死刑だもん」」」」」」」」」

「ノリが軽すぎるわぁ！！」

絶対に逃げ切ってやる！！

「投影―開始！！」

ナイフを投影して縄を切った後、バイクを投影して倉庫の壁を破り、走り去ることに成功した…が…

「無免許運転じゃん！」

やたら巨乳の警備員のお姉さんに捕まり、警備員の詰所できっちり叱られて家路についた。

全くもって、今日は災難な日だった。

第五話　死の鉄槌を（後書き）

元ネタはわかったでしょうか？

次回は原作ブレイクです。

引き続きアンケートと感想ご指摘アドバイスお待ちしております！！

第六話　絶対能力進化計画（前編）（前書き）

この辺は姉メインで行きます。

第六話　絶対能力進化計画（前編）

「返しなさーい！！」

竜胆寿々は自販機を揺さぶっていた。
理由は１０００円札が呑まれたからである。

しかしいくら揺さぶっても１０００円札が出てくる気配はない。
いっそぶち壊してやろうかと思っていたところで

「どうしたのよ寿々？」
そう声をかけてきたのは御坂美琴だった。

「美琴～１０００円札呑まれた～」

「この自販機お金呑むらしいからね～」
そう言って御坂は、
「ちぇいさー！！」
自販機に蹴りをいれた。
すると、ガコンという音を立てて自販機から黒豆サイダーがでてきた。

「こうすればお金呑まれることはないわよ」
御坂が誇らしげに言った。

「私もやってみよ。ちぇいさー！！」

寿々も自販機に蹴りをいれた。

ガコガコガコンと大漁の缶ジュースが出たかわりに、自販機の前面はへこみ、ビーッという警報音が鳴り出した。

その後二人が逃げだしたのは言うまでもない。

…

その後、御坂と別れた寿々は、再び御坂と出会った。「あれ？美琴とはさっき別れなかったっけ？」

すると御坂は

「…美琴、お姉様の事ですか？」

「美琴って妹いたっけ？」

寿々と美琴（あと錬も）は幼馴染みであるが、寿々には美琴に妹がいるという記憶はなかった。

「すいませんがミサカにはスケジュールがありますので」

そう言ってミサカは立ち去った。

「ちょっとまちなっ…て…」

立ち去ったミサカを追って入った路地裏で見た光景は恐ろしいものだった。

ありえない量の血。
散らばる空の薬莢。
そして目の前に血まみれで倒れていたのは…
「ミ…サカ…？」
嘘だとしか思えなかった。
とりあえず警備員に通報しようかと思っていると、
「先ほどはすいませんでした。と、ミサカは謝罪します」
死んだはずのミサカが前方から歩いてきた。
「え、どういうこと？アンタはそこで…」
「そこに倒れているのは妹達ですよ。と、ミサカは答えます」
今度は別のミサカだった。
「”実験場”に入っている時点で関係者かと思いましたが」
「どうやらあなたは完全な部外者のようですね」
いろんなところからミサカが現れた。
「詳細は機密事項のため話せませんが」
「”実験”の”残骸”の後始末をしに来ただけです」

「ミサカは」「ミサカ」「ミサカは」「ミサカは」「ミサ」「ミサカ」「ミサカ」「ミサカは問い」「ミサカは」「ミサカ」ミサカは「ミサカ」「ミサカは確」「ミサカ」「ミサカ」「ミサカは」「ミサ」「ミサカは」「ミサカは」「ミサカ」「ミサカは」「ミサカ」「ミサカは」「ミサカ」「ミサカ」「ミサカは」「ミサカ」

「ここにいるミサカは、全てミサカです」

頭がおかしくなりそうだった。

「現在あなたは極度のストレス状態にある――と、ミサカは断言します。心配なさらずとも先ほどあなたとあったのは検体番号一〇〇三二号、つまりはこのミサカです。”ミサカ”は電気を操る能力を応用し、互いの脳波をリンクさせています。他のミサカは一〇〇三二号の記憶を共有しているに過ぎません。と、ミサカは懇切丁寧に説明しました」

「…あなたは…誰なの！？」

振り絞った声で寿々は問いかけた。

「学園都市に８人しか存在しないＬｅｖｅｌ５、お姉様の量産軍用モデルとして作られた体細胞クローン」

ミサカはここで一度言葉を切って、

「”妹達”ですよ」

そう言ってミサカ達は路地の奥へと消えていった。

…

（美琴は、この事を全部知ってるのかしら…）

寿々は美琴に直接問いただすことにした。

別にメアドを知らないわけではないが、美琴の性格から”絶対に本当のことは言わない”と思ったからである。

そういうわけで常磐台中学生寮に向かっていた。

第六話　絶対能力進化計画（前編）（後書き）

ミサカは書きすぎて精神的につらかった…

第七話　絶対能力進化計画（中編）（前書き）

前回の続き。

シリアスムズい…

第七話　絶対能力進化計画（中編）

常磐台中学生寮前

（あのミサカ達は”実験”と言っていたわ。美琴は状況からして”実験”に”素材”を提供した協力者ということになるけど…人一人簡単に殺すような”実験”に優しい美琴が協力するはずないわ！！）

そんな事を考えつつ歩いていると、高級マンションみたいなインターホンの前に到着した。

寿々は、何度かここには来ているので、使い勝手はわかっている。

「…竜胆ですけど、美琴？」

『竜胆さんですの。お姉様でしたらすぐお戻りになられるかと、御用がおありでしたら中で待つ事をお勧めしますわ』

ガコンという大きな音を立てて両開きの扉が開く。

少し進むとエントランスにでた。ここも相当な広さ、やはりお嬢様学校の寮だけのことはある。

しばらく歩くと御坂の部屋についた。しかし、中にいたのは御坂美琴のルームメイトの白井黒子だった。

「で、なんのようですの竜胆さん？」

白井の問いに対して寿々は、

「美琴はどのくらいで帰ってくるのかしら？」

白井が「お姉様は…」と言いかけたところで廊下から”コツ、コツ”という足音が聞こえた。

帰ってきたかと身構えた寿々だが、

「寮監の抜き打ち巡回のようですわね…こんな時間に他人を連れ込んでいると知れたら大変なことになりますわ！その辺に隠れていてくださいの」

いきなり押しかけておいて迷惑をかけるわけにはいかないので、

「わ、わかったわ」

と、返事をしてベットの下に潜り込むことにした。

そこで寿々が見つけたものは報告書の複製だった。

報告書の内容は、

《量産異能者”妹達”の運用における超能力者”一方通行”の絶対能力への進化法》

《学園都市には8人の超能力者が存在する。しかし”樹形図の設計者”を用いて予測演算した結果、まだ見ぬ絶対能力へ到達できる者は一名のみという事が判明した。》

《唯一、絶対能力に辿り着ける者を”一方通行”と呼ぶ》

…（一部割愛）

《二万通りの戦場を用意し、二万人の妹達を殺害することで同様の結果が得られる事が判明した。》

「なんなのよこのふざけくさった報告書は！！」

そう叫んだ寿々は、報告書を握りしめて寮の窓から飛び出していた。

…

寿々はすっかり日の落ちた街中を駆けていた。

その途中で、風もないのに回っているプロペラを見つけ、その先には――――

御坂がいた。

「こんなとこで黄昏てどうしたのよ？」

表面上はなにも知らないように語りかける。

「別に何でもないわ。ただの夜遊びよ」

「私にはそうは見えないけどな」

そう言って寿々は報告書を取り出した。

すると御坂は驚愕の表情を浮かべて、

「なんで、なんでアンタがそれを持ってるのよ…私の部屋まで入って探したわけ？」

御坂は一度言葉を切って、「それを見てアンタは何を思ったの？私の事が許せないとでも思ったわけ？」

御坂の問いに寿々は、

「そうじゃないわ。そもそも美琴は”ツンデレ”の”ツン”の部分が強すぎるのよ」

軽く茶化したように言った。案の定御坂は、

「アンタはこの期においてまだふざけてるって言うの！？」

激昂したが、寿々はそれを制するように、

「そうじゃない。こーいう時は昔みたいに」

寿々は一度言葉を切って、微笑を浮かべ、

「”お姉ちゃん”に頼んなさい」

優しくそう言った。

第七話　絶対能力進化計画（中編）（後書き）

ぶっちゃけ言うと、最後の台詞がやりたかったっつーのが本音。

感想ご指摘アドバイス、アンケもお待ちしております！！

第八話　絶対能力進化計画（後編）（前書き）

長い話が書けない…

戦闘描写がうまくいかない

そんな作者です。はい

第八話　絶対能力進化計画（後編）

第１７学区　操車場

「午後八時三〇分
第一〇〇三二次実験を開始します」

…

寿々は夜道を駆けていた。
御坂から得た情報をもとに”実験”の場所を探しているところだった。
ドォン！！という大きな音が聞こえた。恐らくその音の発生している場所が実験場だろう。
寿々はすぐさまそちらへ向かった。

…

「オマエは何回殺されてェンだっつのっ！！」

触れられただけでミサカが数mぶっ飛び、ぶっ飛ばした本人は狂笑をあげた。

「さァて、この場合”実験”ってなァどォなっちまうンだ？」

一方通行の見つめる先には寿々が立っていた。

「アンタが一方通行？」

「だったらどォした？そういうテメェは第三位かァ？」

寿々の質問に一方通行が答える。

「そうよ。あんまり退屈なもんで第一位の称号を奪いに来てやったわ。別に興味はないけれど」

「面白れェ。かかってきやがれ！！」

一方通行がそう言ったところで、

「アンタじゃ私には勝てない。能力の相性的に」

寿々は引力を発動し、一方通行を引き寄せようとする。しかし、一方通行の使う反射の力により、一方通行は後ろにぶっ飛んだ。

「アンタの能力は”ベクトル変換”普段は反射にしてあるんでしょ？」

ぶっ飛んだ一方通行に問いかけた。しかし一方通行は何事もなく立ち上がり、こちらに向かってきた。

「よくわかったなァ三下。でもなァ、それで勝ったと思ってンじゃねェぞ」

直後、一方通行が線路のボルトを踏み、浮かび上がった鉄骨を弾いて寿々に向けて飛ばした。

「私に当たるとでも？」

斥力を発動し、向かってきた鉄骨を触れず鉄骨の勢いを殺す。勢いを殺された鉄骨はその場に落ちた。

「調子にのるンじゃねェぞ三下がァ！！」

一方通行が咆哮と共にベクトル変換を使って突っ込んでくる。が、

ドカッ

一方通行の顔面に蹴りがヒットした。そして数mほどぶっ飛んだ。

「なンで反射がきかねェンだァ！？」

一方通行の問いに、寿々は答える。

「アンタの反射を利用したのよ。アンタの反射は向かってきた力の向きを反対にする。なら引力で引き寄せつつ蹴れば引き寄せる力の向きを勝手に反射してアンタは勝手にダメージを負うって訳。」

「そうかァ、ならコイツでどォだァ？」

一方通行がコンテナを全方位から飛ばしてきた。無論寿々は斥力で防ぐが、コンテナから大量の小麦粉が出てきた。

「粉塵爆発って言葉ぐれェ聞いた事ァあるよなァ？今夜は無風だし、危ねェかもしンねェなァ！？」

直後、膨大な爆発音が鼓膜を支配し、辺り一面が火の海となる。

寿々は一方通行の用に自動演算は行えない。つまり爆炎の奔流から逃れる術は能力を全方位に放つしかない。しかしそれを維持し続けられる訳もなく、一方通行からベクトル操作による砂利の嵐をくらう。

「まだまだぜェ三下ァ」

一方通行は再び迫ってくる。しかし一方通行の両手が寿々に触れることはなく、引力により再び数mぶっ飛んだ。

「面白ェ、最っ高に愉快にキマっちまったぞオマエはァ！！」

一方通行は再び突っ込んでくる。しかし顔面に蹴りを入れられ、再びぶっ飛んだ。が、

「くかっ、くかきけこかかきくけきかこくけきこきかかか――――」

一方通行が狂った声をあげ、大気が唸った。

身構えていなかった寿々は十数m飛ばされた。

「風、空気、大気の流れ、あンじゃねェかよォ、目の前のクソをブチ殺すタマがここになァ！！」

一方通行は喋り続ける。

「こンなもンで終わりじゃァねェよなァ、三下ァ！！」

一方通行はベクトル変換を使い、大気を一点に集めてゆく。そうすると――――

――――高電離気体が出来上がる。

「コイツくらってくたばりやがれェ！！」

しかし、高電離気体は霧消した。

発生している地点に斥力を使い大気の一点集中を阻害し打ち消した。

「余裕ぶっこいてんじゃないわよ一方通行。従兄弟のバカの台詞を借りるなら――――」

「――――その幻想をブチ殺す！！」

一方通行を容赦なく引力を使って蹴り飛ばす。一方通行はコンテナ

にぶつかり、起き上がる気配はなかった。その一方通行に寿々は言った。

「アンタは結局優しいやつなんだよ。」

「誰もアンタに挑まないように、誰も傷つかないように、絶対的な力を得ようとした。だけど、」

「そのために犠牲を払って、そんで力を得て、なんの意味があるって言うのよ！！」

そう言い残し、寿々は倒れた。

その後、駆けつけた御坂により、彼女は病院に運ばれ、そこで目を覚ました。

そのころ錬が家で寝ていたのは言うまでもない。

第八話　絶対能力進化計画（後編）（後書き）

垣根君は…出そうかな？

第九話　鍊の8月31日（前書き）

当麻の記憶喪失はなかった方向で…

第九話　錬の8月31日

8月31日

大抵の学生は今日まで忘れていた悪夢に後悔しつつ、自分の寮で泣きながら課題をやっているだろう。

俺は第7学区内をうろついていた。
課題はもちろんやってある。
常磐台中学生寮付近を通ったところで、美琴姉から、

「ごめーん、待ったぁ～？」
と、声をかけられた気がしたがトラブル臭しかしない上に、眠たかったのでシカトした。

「無視すんなやコラー！！」

の声と共に、いつものビリビリではなくタックルに驚いたが、事情の説明なしに引きずられていった。

「美琴姉、いきなりタックルかましてその上引きずり回すなんて何の拷問だよ！？」

「ちょうどいいところにいたわね錬。アンタに頼みがあるのよ」

「引きずり回した人の態度じゃあないよね！？」

どうせろくでもない事だろうと思っていた。なんせ人をいきなり引きずり回した上に上から目線で頼み事である。想い人にもビリビリしか飛ばせないし。

「恋人の役をやりなさ――「断る」異論は認めないわ」

漏電していた。

感電死したくないので渋々命令を聞くことにした。

「で、なんでいきなり恋人役なんてやらせたのさ？」

「まぁまぁ、これでも食べなさい。美琴姉さんがおごってあげよう」

そう言ってはぐらかされ、２０００円と言うあり得ない額のホットドックを差し出してきた。クソうめぇ、さすがは常磐台生御用達といったところだろうか。

「で、なんで恋人役なんてやんなきゃいけないのさ」

「この一週間毎日理事長の孫にデートに誘われてて、立ち場的に断りにくいのよ。だから彼氏とかいたら諦めてくれるかと思ってアンタをつかまえたわけ」

「理不尽な…」

「どうせ暇でしょ？」

これ以上なにか言うと感電死させられそうなので大人しく従うことにする。

まだ死にたくないし。

「恋人役って具体的になにやるのさ？」

当然の疑問を口にしてみた。

「仲良さげに一日ぶらぶらしてりゃあ良いんじゃない？」

かっさらっといて適当だなオイ。

と、言いかけたが心の底に止めておくことにする。

「まあジュースでも買ってくるわ」

「甘いのはパスな」

「オッケー」

美琴姉は自販機に向かったし、逃げるとしますか。

俺はバイクを出して逃げ去った。

…

そんなこんなで夕方。
再び街中をぶらついていると、
「錬じゃねぇか。久しぶりだな」
当麻兄こと上条当麻が現れた。
ちなみに当麻兄とは従兄弟だが、最近はあまり会わなかったり。となりの修道服着たちっこいのはなんだ？
「久しぶりだね当麻兄。となりのちっこいのはなんなの？」
疑問を口にしてみた。すると、
「私はちっこいのじゃないんだよ！」
ちっこいのが反論してきた。
「じゃあ名前はなんだちっこいの」
「私の名前はインデックスって言うんだよ」
胡散臭せえ。修道服と相まってさらに胡散臭せえ。
しかし名乗らせた以上名乗らないわけにはいかないので、
「そうか。俺の名前は竜胆錬だ。よろしくなインデックス」

「よろしくなんだよ。れん」
「と、まあ自己紹介も終えたところで晩飯食いにいくんだが錬も一緒に来るか？」
ぶっちゃけ晩飯はまだ食べてなかったので、
「じゃ、ご一緒しますか」
と言うわけで晩飯をとることにした。

…

ところ変わって某ファミレス。
「当麻兄何やってんの？」
「夏休みの宿題全然終わってねーんだよ」
某ファミレス内で晩飯を食べる予定なのだが、当麻兄が原稿用紙を取り出しなにかを書き出した。タイトルは…
「…とうま、私の確かな記憶では『桃太郎』の物語は分類・童話で

対象年齢3歳から7歳なんだよ…」
ちびっこもといインデックスがもっともなことを言う。
「お前に桃太郎の何がわかる！！」
「どう考えても桃太郎で読書感想文書こうとするアンタがおかしいだろ！！」
「とりあえず埋まっときゃどーでもいいだろ」
「アンタ相変わらず適当だな…」
適当に話の収束がついたところで、
「”断魔の弦”」
窓ガラスが砕け散った。
幸い俺たちは全員無傷だった。
「無傷とは少々予想外だが無益な殺生が減るなら喜ぼう」
右腕に弓をつけた籠手のような物を装備した黒いスーツの男が立っていた。
「テメェなにしやが――「お前は魔術師か」は？」
マジュツシ？ナニソレ？
「いかにも」

オイオイ認めちゃったよ…
「無駄な抵抗をしなければ君たちには手を出さない。一〇万三〇〇〇冊を秘めたる禁書目録さえ手に入れば用はない」
「”透魔の弦”」
するとスーツの男とインデックスがいつのまにか消えていた。
「クソッ、やられた。追うぞ錬！！」
「状況はあとで説明してくれよ！！」
俺たちは店を飛び出し、インデックスを探すこととなった。
…
とあるビルの屋上――
「何をやったって私はしゃべらないんだよ」
「しゃべりたくないのならそれでも構わん。

引き出してみせよう。君の頭の中の一〇万三〇〇〇冊の魔道書を」

…

「どこいきやがったんだ！？」

「当麻兄、空から探すぞ」

「どうやっ――「投影―開始！」どっから出した！？」

俺はヘリコプターを投影した。

「こいつは長くは持たねぇ。早く乗ってくれ！！」

「お前免許ないよな！？」

当麻兄のもっともな疑問に対し、俺は某浜面の名言？をかえす。

「必要なのはカードじゃない。技術だ！」

…

再びとあるビルの屋上――

「これは――神楽舞台？」

「そんな大それた代物ではない。さしずめ盆踊りの会場といった所だ。コイツの威力を増強しようといった魂胆でな」

「……梓弓？」

「それは日本の文化圏もカバーしているのだな。コイツは一定の条件を揃えれば相手の心を読み取る事が出来る。例えるなら君の一〇万三〇〇〇冊を暴く事もな――」

「だ、ダメ！これはあなたの思ってるようなものじゃない！！私以外の人間が魔道書の原典を読むとどうなるかわかんないんだから！！」

「無論―百も承知」

…

ブロロロロとヘリのローター音を響かせ飛んでいるなか、とあるビルから不自然な光が発生した。

「おい、あの光はなんだよ当麻兄！？」

「多分魔術の一種だろ。とりあえずそっちに向かってくれ！！」

「了解！！」

…

「たった一冊読み取るだけでこれほどの衝撃とはな…」

「もう…やめて…これ以上はあなたの心が耐えられない」

「ならあきらめろと？私は二度と挫折しないために魔術師になったというのに」

ブロロロロ…

「当麻兄！もうじきヘリが消えるからあとは頼むぜ！！」

「わかった！！」

とあるビルの屋上の上辺りでヘリが消滅した。
空に投げ出された俺達はビルに着地し、当麻兄が近くの縄に触れると、神楽舞台は消え去った。

「心配かけさせやがって」

「とうまぁ」

インデックスが当麻兄の元へとよっていった。魔術師とやらは何故かボロボロだった。

「…悪いのか。この命と引き換えに誰かを救おうとするのは」

魔術師からの問いに俺は答えてやった。

「カッコつけてんじゃねえぞ魔術師とやらが。その誰かとやらを救えたとして救ったやつが死んだら意味あんのか？一人でキレイに終わらせようとしてんじゃねぇよ」

「そうだぜ、錬の言う通りだ。そしてお前の『大切な人』ってのはどこにいるんだ？」

「何を言って…」

「俺の右手は『幻想殺し』って言うんだが『異能の力』なら触れるだけで打ち消せる。たとえそれが”呪い”とかでもな」

魔術師は心底驚いたような顔をして、

「本当か！？」

と、問いかけた。

すると当麻兄とインデックスはうなずきあって、

「じゃあ案内してもらうぜ。アンタだって助けたいだろ？自分自身の手で」

魔術師は一筋の涙を流し、呟いた。

「感謝…する」

「そうと決まれば急ぐぞ。明日の始業式までには帰ってこなくちゃなんないしな。」

「とうまとうまお泊まり？」

と、インデックスがＫＹ発言をし、

「錬の家にな」

当麻兄がかえし、魔術師と共に出発した。

そして俺は――

「インデックス、一つだけ聞いていいか？」

「どうしたの？錬」

「魔術って――なんだ？」

――魔術と関わりを持つことになる。

第九話　錬の8月31日（後書き）

錬の能力の捕捉

投影によって作ったものは、カーテナでいった残骸物質扱いなので、幻想殺しでは壊れません。

あと、大きな物ほど投影を維持出来る時間は短くなります。

第十話　始業式（前書き）

シェリー編スタート！

第十話　始業式

始業式

夏休みという合法的に勉強しなくていい期間も終わりを告げ、再び勉強という苦行を与えられる事となる日である。

「貴様ら…覚悟はいいよな？」

錬は、登校早々覆面共（第五話参照）と思われるクラスメイト達（以後、バカ共とする）への処刑を開始した。
刑罰の内容は、手錠で両腕を拘束し、正座させて石畳を膝に乗せるというものだ。

江戸時代の拷問の一種と言えば辛さがわかるかもしれない。

「「「「「「「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」」」」」」」

「相変わらずハモりすぎて怖いわ！！」

さすがにこの光景を教師に見られたらまずいので（他のクラスメイト達はかなり引いている）解放してやることにする。

「次やったら貴様らまとめて串刺しにするからな」

死刑宣告をぶつけつつ手錠と石畳の投影を破棄した直後に、

「「「「「「「「「チャンス！！異端者には死の鉄槌を！！」」」」」」」」」

バカ共が嬉々として襲いかかってきた。

「ハモりすぎて怖ええしいい加減にしやがれ！！」

バカ共を武力鎮圧し、物言わぬ屍を積み上げたところでチャイムがなり、教師が教室に入ってきた。

「それじゃ、ＨＲを始めるぞー」

この光景は、日常茶飯事なようで…

…

「あ、なに？上条ひょっとして宿題忘れてんの？」

「えっと、上条君。本当に宿題忘れちゃったの？」

「うおおやったーっ！俺達だけじゃねえ！仲間は他にもいたーっ！」
「バンザーイ！先生の注目浴びんのはどうせ不幸な上条だけだから、これで僕らのダメージは軽減されるかも！バンザーイ！」
とまあクラスメイトたちが上条当麻の不幸を喜んでいるなか、教室の端の方で吹寄制理が口を開いた。
「まったくどいつもこいつも…宿題をやろうとは思わないの？」
それを聞いていた寿々は、
「うちのクラスメイトたちにそれを求めんのは無理な話じゃない？」
「そういう寿々は――「やってないわよ」そりゃそうよね…」
竜胆寿々は補習常連のおバカである。
能力開発時間割りにおいてはＬｅｖｅｌ５だけあって問題ないが、他は問題だらけである。
上条ほどではないが…
「まあいざとなりゃあ弟にやらせりゃいいしね」
「弟さんが不憫だわ…」
「ま、私はＨＲまで寝るわ。おやすみ～」
そう言って寿々は自分の席へとつき、眠りについた。

「はいはーい、それじゃさっさとＨＲ始めますよー。始業式まで時間が押しちゃってるのでテキパキ進めちゃいますからねー」

寿々が目を覚ました頃には、担任のミニマム教師・月詠小萌こと小萌先生が教室におり、ほとんどの生徒が着席していた。

「えー、出席を取る前にクラスのみんなにビックニュースですー。なんと今日から転入生追加ですー」

クラスの面々の注目が小萌先生に向かう。ちなみに寿々は二度寝を開始した。

「ちなみにその子は女の子ですー。おめでとう野郎共ー、残念でした子猫ちゃん達ー」

クラスの面々がいろめき立つが、寿々は夢の世界へまっしぐらだ。

上条が頭を抱えてぶつぶつ言っていたが、まあ関係はないだろう。

教室の引き戸がガラガラと音を立てて開かれ、長い黒髪の少女が入ってくる。

「私は姫神秋沙。とりあえずよろしく」

その姫神とかいった少女は上条と顔見知りのように話していたが、上条の能力？である”旗乱立（フラグメーカー）”にかかれば何らおかしいことではない。

その後の上条の事については割愛しておく。

…

インデックスは退屈だった。

昨夜の事件のあと、錬に魔術とはなんたるかを説明し、（正直、当の本人はあまり理解していない）翌日錬の家の冷蔵庫を空にしたあと自宅に帰って部屋でゴロゴロしていた。

「はっ、今日のお昼ごはんがないかも」

そう呟くと、三毛猫のスフィンクスを抱えて自宅を飛び出していった。

…

インデックスは学校に来ていた。

学校といっても上条の通う高校ではなく、錬の通う柵川中学の方である。

上条の通う高校に向かっていたのだが迷ってしまい、とりあえず見かけた学校に入ったらそこが柵川中学だったわけである。

つまりは偶然ということだ。

校舎内を散策していると、インデックスは食堂の横に差し掛かった。中から漂ってくる美味しそうな匂いにピタリと足を止め、ゾンビのような足取りで入っていく。

「……、おなかへった」

朝っ早から人の家の冷蔵庫を空にしておいて言える台詞ではないが、その辺はインデックスの胃の許容量がパネェと言うことで。

部屋の隅に置いてある食券販売機に近づき、適当に操作する。

（そう言えば私、お金持ってないかも…）

重大な事実に気づいたインデックスは、がくりと肩を落として床に崩れ落ちた。

そんな彼女の肩が何者かに叩かれた。

始業式は体育館で行う。
しかし錬は廊下をうろついていた。
理由はバックレである。
すると昨日泊まりに来たインデックスとか言う少女が見慣れない少女と何故か食堂にいた。
「あ、れんだ」
「あ、じゃないでしょうが。何でインデックスがここにいるんだ？たしかお前帰ったよな？」
「とうまを探してたらここに着いたんだよ。ねえ、とうまはどこ？」
「ここにいないことだけは確かだ。で、隣のは誰だ？」
見知らぬ少女はビクリと肩を震わせたが、インデックスは憮然としたまま、
…

「よく分かんない。でも友達」

よく分かんない、という言葉に引っ掛かりつつ、

「そうか友達か。そいつぁ良かったな。当麻兄に連絡とってやるから大人しく静かにしてろ」

錬が投げやりな感じで言うと、

「なんか適当にあしらわれた感じがするんだよ…」

インデックスがそう言うと、インデックスの隣にいた少女がゆっくりと深呼吸して、名乗った。

「わ、私は…風斬氷華って、言います…あなたは？」

「俺は竜胆錬だ」

互いに名乗ったところで上条から折り返しの電話がかかり、どうせならそのまま遊ぼうと言うことで地下街へと向かった。

…

今日はどこの学校も始業式のため、昼過ぎの街には学生達が一斉に解放された。
寿々はそんな雑踏の中を気だるそうに歩く。
すでに高校の制服から私服に着替えているが、右腕に腕章をつけており、それは風紀委員のものであることを示すものだった。
（こんなに暑いのに働かないといけないわけ？まったく面白そうだからって風紀委員なんてやるんじゃなかったわ…）
残暑厳しい炎天下の中、わざわざ街中を歩いているのには理由があった。
（あいつをシバいて仕事は終わりね…）
１０ｍほど前方にいる人影を携帯電話の画像と照らし合わせて確認する。
その金髪の女は真正面から学園都市に突入しており、その際に数名の負傷者をだし、不法侵入して現在指名手配中であった。
寿々はズボンのポケットから小型の拳銃のようなものを取り出し、その銃口を真上に向けて引き金を引いた。
（まあ始末書は後輩に書かせればいいわ）
ポンというコミカルな音を立てて銃口から金属筒が７ｍほど上に向かって発射され、ドカッ！と眩いばかりの閃光を撒き散らした。
これは避難命令の一つであり、３０秒もしないうちに人影が消え、

金髪の女と寿々以外誰もいなくなった。

直後、金髪の女は寿々に向かって来た。しかし、それは金髪の女の意思ではなく寿々の”相対操作”の引力によるものである。

「――ぶっ飛べ。ゴスロリ金髪」

回し蹴りを放つ。斥力を併用し威力を上げたそれをくらった金髪の女は見事にぶっ飛んだ。しかし、その女は泥のように崩れ、先程いた１０ｍ先の場所にいた。

「変わり身？アンタ面白いことするわね」

金髪の女は笑っていた。

左手にオイルパステルを持ち、アスファルトにオカルトな言葉を書いていた。

すると、寿々の後ろの地面が爆発し、２ｍ程のアスファルトの腕が生えていた。

「こんどは何？手応えがあると嬉しいわ」

アスファルトの腕が寿々に襲いかかったが、その腕は斥力に阻まれ、寿々に触れることはなかった。

「拍子抜けだわ。さっさとシバいて…」

寿々が金髪の女を追ったところで、斥力に耐えきれなくなったアスファルトの腕が爆発し、気をとられた隙に金髪の女は姿を消してい

た。

「逃げられたわ…始末書の書き損じゃない！！」

寿々は憤慨しつつ捜査を再開した。

第十話　始業式（後書き）

指が疲れます…

第十一話　放課後の地下街にて

「おー。とうま、これがウワサの地下空間なんだね！？」

「地下街な、地下街」

はしゃぐインデックスに寝不足上条はローギアでツッコミを入れた。

「えー学園都市には地下街が多く駅を中心に各デパートの地下を繋げ迷路のように展開しており多くの学生で賑わっております」

「お前は誰に説明してんだよ…」

またもや上条はローギアで錬にツッコミを入れたが、インデックスの「とうま、ごはんはまだ？」という言葉をうけ、とりあえず昼食をとることにした。

「インデックス、なんか希望とかあるか？あー行列とか高いトコは禁止な」

「そんな所じゃなくてもいいよ。安くて美味しくて量が多くて人の少ないお店がいい」

「んな都合のいいとこなんてあるわけねーだろ」

インデックスの無理難題に対して錬が不機嫌そうに口を開く。

「まあ……、そういうことだ。風斬は？」

上条は先程から無言で空気と化していた風斬に尋ねるが、何故か彼女はびくっと肩を震わせてインデックスの陰に隠れてしまう。

「まあ当麻兄は目付きわりぃからな」

「そうだね。とうまは目が怖いもん」

錬とインデックスからやや冷たい目でダブルパンチをくらい、

「どの辺がだ、そして錬にだけは言われる筋合いはねぇ！」

と、言い返すもインデックスが風斬の言わんとすることが分かっているように、

「その獣のように婦女子を虎視眈々と付け狙うような目が。普段は人畜無害ですよーと主張しておきながら美味しい所は一片たりとも逃さんと黙して語るその目が怖いっ！！」

それに便乗するように錬が、

「そうだ！それにそのツンツン頭といい端からみたら不良だろーが！！」

二人に対し上条が反論する。

「テメェが余計なこと吹き込むから無駄に怖がるんだろうが！！そして錬！お前より不良みたいなやつはそうそうおらんぞ！！」

三人がそういった口喧嘩をする中、風斬は「……あ、あの……お昼ご飯……」と口を開き、それを聞いた三人は口喧嘩をやめ、彼女の

方へ振り返る。

そして風斬の指指す先には学食レストランがあった。

「えー学食レストランというのは学園都市にある大小無数の学校から学食のレシピの美味いものを集め一軒の店を賄ったものであり、同時に他の学校では何食ってんだという疑問も解消する店ですよ」

「だからおまえは誰に説明してんだよ…」

上条は先程のようにツッコみつつ入店し席につく。

「一息で言ったから疲れた…」

「感想は聞いてねぇよ…」

感想を述べた錬に上条がツッコみ、メニューを逆さにするというベタなボケをかましつつ、

「む。れん、そもそも学食とか給食って何？」

と、聞いてきた。

「学食っつーのはアレだよ。アレ、学校でしか食べれない料理の事だ」

「限定商品というヤツだね！」

「そう、それそれ！レアだぞレアー」

「あの……説明が、面倒臭いからって……適当にするのは、どうか

と……」

適当な説明をかます錬に対し、風斬が腰の引けた一言を加えるがインデックスの耳には届いておらず、彼女は馬鹿でかいメニューで顔を隠しつつ上条の顔色を伺っているが、彼は寝不足のため机に突っ伏したまま「高いのは禁止な～」と呟いていた。

すると、インデックスが何を食べるか決めたようで、

「とうま、これはダメ？」

そこに書かれていたのは…

”常磐台中学給食セット　　四〇〇〇円”

しばしの沈黙のあと、上条はメニューの角でインデックスを叩いた。

「痛ったあ！なんでいきなり人の頭を叩くの？」

「言ったよな！？高いものは禁止だと。てかツッコミ待ちじゃないのか！！」

「ツッコむんなら言えよ！ハリセンぐらい出すぞ！！」

「知るかぁぁぁ！！」

どんどん脱線する二人をよそに、風斬が一つのメニューを指す。それは、妙に質素なコッペパンと牛乳に代表される、ごく普通の給食の写真が。

インデックスの後でさらに錬と無駄な争いを繰り広げていたため、

不覚にも上条は感動してしまった。

「みなさいインデックス。これが優等生というものの答えだ」

「えー、ひょうかの好みはちょっと地味かも。私はもっと派手派手なのが食べたいんだよ」

ぶーぶーと文句を垂れるインデックスに重たいため息をついて、

「食べ物は見た目じゃなくて味で選ぼうな、インデックス。あと、どさくさに紛れて風斬に常磐台中学セットをオススメしてんじゃねぇバカ！　風斬も地味とか言われて本気でへこんだり考え直したりしなくていいから！」

上条が叫ぶと風斬はビックリしたらしく、メニューを掴んで自分の顔を隠してしまった。ちなみに錬は黙りである。

…

しばらくすると、四人分の料理が運ばれてきたが、

「錬！お前なに一人だけ高そうなモン頼んでんだよ！！」

三人の明らかに普通の給食メニューとはちがい、錬のメニューは高そうだった。

ちなみに”長点上機学園セット　三〇〇〇〇円”である。

「安心しろ。自腹だから」

「そーいう問題じゃねーだろ！ずるいぞお前だけ！」

「そうだよ！なんかれんがとっても羨ましいんだよ！！」

「羨ましかったら自分で頼むんだな！一口たりともやらねぇよ！！」

「ウガアァァァ！！」

するとインデックスが唸り声をあげ、口を開いて飛びかかってきたが、錬はセラミック板を投影しこれを防ぐ。そんなやり取りが何度か繰り返され、錬は自分の分を完食することに成功した。

あのインデックス相手に、である。

…

錬は一人、地下街を歩いていた。

上条、インデックス、風斬の三人は昼ご飯に納得のいかなかった（錬が長点上機学園セットを食べたため）インデックスの機嫌を直すためにゲーセンへと行っている。

同行しなかったのは、単に居づらかったのと、面倒臭かったからである。

（さーて、どうすっかなぁ…）

適当にぶらつき、書店などで資料（漫画やバイクなどのカタログ、など）を購入し、上条たちに合流しようか考えていたところで、頭の中に声が響いた。

（これは念話能力の類いか。へえ、テロリストに特別警戒宣言ねぇ……面白れぇじゃねぇか）

…

ガゴン！！　と。地下街全体が大きく揺れた。

「危なっ！」

天井から粉塵のようなものが落ち、全ての照明が同時に消えた。少し遅れて非常灯の赤い光が薄暗く周囲を照らした。

人の波がパニックを起こし、猛牛の群れのような足音が殺到した。

今度は、低く、重い音が響いた。

警備員が隔壁を下ろし始めたのだ。

そんな状況を知ってか、再び地下街全体が大きく揺れた。

第十一話　放課後の地下街にて（後書き）

これから魔術メインの予定だけど…

タイトル魔術にしよっかな…

第十二話　開戦（前書き）

一週間空けてすいません！！

テストとか追試とかテストとか追試とかテストとか追試とかテストとか追試とかテストとか追試とかテストとか追試とかテストとか追試とか憂鬱なことが多かったので
更新が滞ってしまいました。

今は開き直ったので大丈夫かと思います。

相も変わらず駄文ですが…どうぞ！！

第十二話　開戦

時間を少し遡る。

インデックスによって八〇〇〇円の出費をさせられた後、ラッキースケベ的なお約束展開のあと、インデックスにより頭を噛まれた上条は、そろそろお財布的にもキツいので帰ろうかと思っていた。

しかし日常に割り込んだ非日常により、彼の考えは断ち切られる。

『――見ぃつっけた』

それは妖艶だが、どこか錆び付いたような、そんな女の声だった。

そして、それは何もないはずの壁から聞こえた。

上条は視線を向け、硬直した。壁の、ちょうど上条の目線の高さの辺りに、掌サイズの茶色い泥がへばりついていた。

ただし、その泥の中央には人の眼球が沈んでいた。

眼球の表面がさざ波のように細かく揺れ、その振動が『声』を作り出した。

『うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書目録に、幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃうわぁ』

しかし、その退廃的な声は一転し、

『――ま、全部ぶっ殺しちまえば手っ取り早えか』

場末の酒場でも聞かないような粗暴な声色へと切り替わり、ガコン！！　と。地下街全体が大きく揺れた。

それまでのろのろと出口に向かっていた人の波がパニックを起こし、出口へと猛烈な足音が殺到する。

そんな状況を知ってか知らずか眼球が再び声を放つ。

『さあ、パーティを始めましょう――――』

そして、ひび割れたスピーカーを動かすように、

『――――土の被った泥臭ぇ墓穴の中で、存分に鳴きやがれ』

さらに一度、一際大きな振動が地下街を揺らした。

…

ゴガン！！　と、再び地下街全体が大きく揺さぶられた。
だんだん爆心地へと近づいている気がする。薄暗い通路の先から銃声や人の怒号と絶叫らしき声色まで流れてくる。

（本命のお出ましっつー感じかな）

心の中でそう思いながら錬は先へと進む。
しばらく先に進んでから錬が見たのは――――、

…

それから少し過ぎて、上条たちは御坂と白井に会っていた。

そして色々とあり、（割愛）長い長いステレオ説教から解放されたところで簡単な事情の説明を行う。（魔術うんぬんの話は割愛してある）

「ふうん。よく分かんないけど、結局またアンタが何かトラブルに巻き込まれてんのね。今度はテロリストときましたか。ねぇ黒子、さっきの金髪ゴスロリと関係あると思う？」

御坂はつまらなさそうに白井の方を見る。

「そうですわね。殿方達が聞いたとされる声の特徴からしても、関与はしているでしょうね」

その後も二人は何かしらの討論をしていたが、全て超能力で片付けようとしているため、結論には至らないだろう。

「しかしテロリストの侵入を許すとは……わたくしも気を入れ直す必要があるようですわね」

何か話題を変えようと、上条は口を開く。

「っつか、お前達は何でここにいるんだ？」

「わたくしは風紀委員ですので、閉じ込められた方達の脱出用にやってきた、という所ですの。これでも一応”空間移動”の使い手ですので」

「ふうん。じゃあ美琴は？」

「え、いや、別に私は……」

「？」

「な、何よ！別に何でも良いでしょうが、何でも！！」

何故か御坂は顔を真っ赤にして叫んでいた。

…

上条は一人、地下街を走っていた。

インデックスは、御坂と共に白井の”空間移動”で脱出し、風斬は白井が戻って来るのを待っている。

敵の強さも正体も測れないが、耳に届く戦闘の音は身震いするようなものだった。あれが襲いかかれば人の命など容易く奪われるだろう。

それだけは、させる訳にはいかない。

上条はその右手を強く握りしめ、闇の奥へと走っていく。

…

―――戦場だ。

テレビやゲームなどとは違う、本物の戦場だ。

目の前でに広がる光景は人々が争うものでも、銃声や怒号が飛び交うものでもない、傷つき、折れ曲がり、引き裂かれた人間が、壁や柱に寄りかかっていた。ここは第一線ではなく、傷つき敗れた者達が一時撤退し、傷の応急手当をする野戦病院のような場所だった。警備員。

その数、約二〇弱。

いったいどれ程の相手と立ち回ったのかは知らないが、彼らの怪我は尋常なものではなかった。

しかし彼らに撤退の意思は感じられず、少しでも体の動くものは近くの店からテーブルや椅子などを運びだし、バリケードのようなものを作ろうとしていた。

彼らは彼らで必死だ。ここでもし彼らに見つかってしまえば、この先へと進めない上に彼らにも迷惑がかかるだろう。

そう思い、錬は迂回ルートをとることにした。

…

上条もまた、錬と同じものを目にしていた。

それを見て、曲がり角で呆然としていた少年の姿を壁に寄りかかるようにして座り込んでいた警備員が見咎めた。驚くべき事に女性だった。彼女は傷ついた仲間の腕に巻いていた止血テープの動きを止めて、

「そこの少年！　一体ここで何をしてんじゃん！？」

怒号に、その場にいた十数名の警備員が一斉に振り返った。上条が答えられずにいると、大声を出した女性はいかにも苛立たしい調子で舌打ちして、

「くそ、月詠先生んトコの悪ガキじゃん。　どうした、閉じ込められたの？　少年、逃げるなら方向が逆！　Ａ０３ゲートまで行けば後続の風紀委員が詰めてるから、出られないまでもまずはそこへ退避！　メットも持っていけ、ないよりはマシじゃん！」

警備員の女性は、怒鳴りながら自分の装備品を外して上条へ乱暴に放り投げ、彼は慌てて両手で受けとる。

だが上条は、さらに奥へと歩を進める。

警備員の女性がなにか叫んでいたが、上条には届かなかった。

右手を握り締め、通路の奥へと向かう。　しかしそこでおかしい事に気づいた。

（物音が……聞こえない？）

上条の胃袋の辺りに、何か嫌な予感がのし掛かる。

（まさか……）

薄暗く、赤い照明に照らされた通路の先へ彼は走る。

その先にあったものは――――。

「うふ。こんにちは。うふふ。うふふうふ」

錆びた女の声が薄暗い空間に反響した。

漆黒のドレスを着た、荒れた金髪にチョコレートのような肌の女が通路の中央に立っており、その盾となるように、石像が立っていた。

それは、鉄パイプ、椅子、タイル土、その他あらゆる物を押し潰し、練り混ぜ、形を整えできた巨大な人形だった。

「他のやつは一緒ではないのね。　まあいいわ。　ブチ殺すのはテメェでも問題ねえワケだしっ！！」

女がオイルパステルを横一閃に振り回す。

その動きに連動するように、石像の拳が振るわれる。　突然の事に上条の体が強ばる。

「投影―開始」

そう聞こえた時、上条の隣に、警備員でも使われている盾を構えた錬がその一撃を受ける。　しかし錬は盾ごと飛ばされ、盾は無惨に凹み、砕け散った。

「いつつ……なんてチートな」

錬はなんとか起き上がる。

「錬！お前何でここにいるんだ！？」

「人のことは言えないよな、当麻兄」

そう言って錬はいつもの真紅の槍を投影する。

「何やってんだよ！　早く逃げろ！」

「アンタが逃げるなら逃げてやるよ。　生憎俺は知り合い一人戦場に残して逃げるなんて真似はできないんでね」

「そろそろお話は終わったかしら？」

女は再びオイルパステルを一閃する。

すると今度は石像が足を踏み鳴らし辺りが揺れた。　錬も上条も立っているのが精一杯だったが、女だけは平然と立っていた。

「地は私の力。そもそもエリスを前に誰も地に立つことなどできはしない。　ほらほら、無様に這いつくばれよ負け犬。　その状態から私に噛みついてみろってんだよ」

上条はバランスを崩し、倒れ込んでしまい、錬は槍を支えに辛うじて立っている。

そんななか、上条は倒れたまま女を睨み付け、

「お、前……っ！」

「お前じゃなくて、シェリー＝クロムウェルよ。　まあここで死ぬんだしイギリス清教って名乗っても意味がないわね」

その紹介に対し上条は眉をひそめ、錬は首をかしげた。

「戦争のための火種が欲しいんだよ。　だったら私がイギリス清教の手駒だって言うことを知ってもらわないと、ね？――エリス」

シェリーがオイルパステルをくるりと回す、すると石像が再び足を踏み鳴らし辺りが揺れる。

それはさながら開戦のゴングのように…

第十二話　開戦（後書き）

突然ですが魔術師のネタを募集しようかと、何かあったらご提供くださるとありがたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9032y/

とある科学の贋作投影

2011年12月18日03時45分発行